

# 石コウのタマゴ ワークショップの可能性

長谷川 重 雄

## 1 はじめに

平成19年8月19日(日)に当館の講座室において「アートなタマゴ! 石コウで遊ぼう」というタイトルでワークショップを行った。当館のワークショップは、子どもから大人までを対象に、参加体験をとおして美術や美術館に親しんでもらう事業として位置づけられ、美術に親しむために制作を中心とした「びじゅつ☆体験隊」と美術館に親しむために作品鑑賞や施設見学を中心とした「発見! びじゅつかん」の2つの柱で構成している。今回のワークショップは、美術に親しむために制作を中心とした「びじゅつ☆体験隊」の一環として行われたものである。

「まなび」における経営理念と目標である、

- ①あらゆる世代、あらゆる地域の人々を対象に美術館活動を展開し、人と美術を近づける。
- ②美術を糸口に、創造力を育む多彩な美術館活動を開発し、提供する。

をもとに、日常生活にあまり馴染みのない石コウと身近な素材であるゴム風船を使って、張りのある滑らかな曲面の美しさをもつ石コウのタマゴをつくるワークショップを考えた。このワークショップをとおして、石コウという素材に触れ、つくる喜びを味わうこと、そして、タマゴに込める思いを豊かにふくらませていくことで、人と美術を近づけ、創造力を育むことを目指している。

## 2 題材開発について

この題材は、20年ほど前、中学校の教員だった私が石コウを使った今までにない題材を開発しようとした結果を応用したものである。

- ・美術室に蛇口の数がある程度ないと制作できない。
- ・水と混ぜ合わせる割合が難しい。
- ・すぐに固まって使えなくなる。



写真1



写真2

- ・固まって使えなくなった石コウの後始末がたいへんである。

このような理由で、その頃は、もうすでに学校現場で石コウを取り扱う題材が敬遠されていた。これまでの石コウを使った技法には、モデリング、カービング、石コウ直付けなどがあった。粘土で形をつくり、石コウをかけ、型をとり、その型に石コウを流し込み形成するモデリング。石コウの塊を削っていくカービング。芯材に紙や繩、金網をかぶせた上に直に水で溶いた石コウを付けていく石コウ直付け。いずれにしても、練り上げた構想と長時間に及ぶ制作、準備が必要である。授業時数も減り、一つの題材にだけじっくりと時間をかけることが困難になっている学校現場にとって、石コウを取り扱う題材が敬遠されても仕方がない状況だった。

それでも、表現素材として優れた可能性を持つ石コウを使った題材ができるのかと以下の条件を掲げ題材の開発を進めた。

- ・準備、制作に長時間必要とせず、複数回の制作・追究ができる。
- ・多様な表現が可能である。
- ・難しい説明や複雑な制作過程がなく、専門的な道具も必要ない。
- ・技術能力、器用不器用が問われず、気軽に楽しめる。

試行錯誤の結果、ゴム風船の中に石コウを流し込み形成する題材を開発した。開発上、最大の問題点は、じょうごなどを使ってもゴムの内圧で石コウが流れ込まないことがある。そこで考えたのは、砂時計の砂が下へ落ちるよう、閉じた空間と閉じた空間をつなげるという発想だった。つまり、予め石コウを流し込んでおいたペットボトルと膨らませておいたゴム風船を連結させ石コウをゴム風船の中に流し込むのである。後は、紐で縛ったり、吊り下げたり、板で押さえたりして外圧を加え形成する。ビニール袋やラップの中に入れても面白いのだが、張りのある滑らかな曲面の美しさは、ゴム風船独特のものである。また、ゴム風船の中の空気を抜いても残しても、それに応じて多様な表現が可能であり、溶かす水の中に水性絵の具を入れれば、カラフルなものとなる。そして、中の石コウがゴ

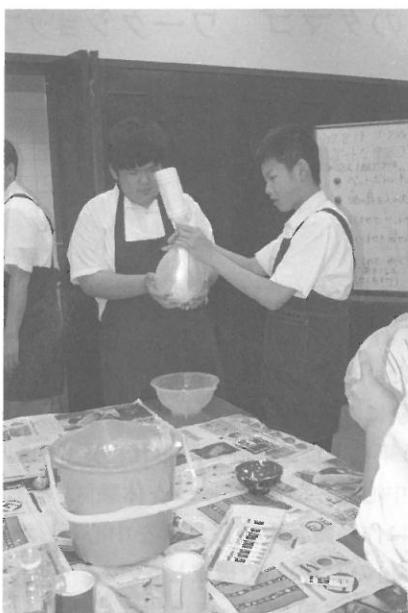


写真 3



写真 4

ム風船を取り除いても大丈夫な硬化時間も30分程度と短く、時間を置かずに出来栄えを確認できる。

今回は、初めて石コウを扱う親子連れの参加を想定し、絵の具をいれた水で溶いた石コウを用いて、外圧を加えないタマゴ状になる一般的なゴム風船を使って、ワークショップを行った。

また、題材のネーミングのタマゴについては、形状的なものだけでなく、つくろうとする一人ひとりがそれぞれの思いを込め、ふくらませていけるように、そして、それが表現できるように願って考えたものである。

### 3 ワークショップ

#### (1) 事前準備

当館には、実習室ではなく、水道の蛇口が1つある定員30名ほどの講座室で行った。主に長机2台で4人同時に制作を行い、他の長机に出来上がったものを置き、台座をつくって完成させ、袋に入れて持ち帰ってもらうこととした。

一人分の制作に必要な用具とその使い方・注意点は以下のとおり。

- ・石コウ300g程度(市販されている工作用の石コウ)
- ・ゴム風船(市販されている一般的なゴム風船)
- ・ペットボトル(500cc程度のもの)
- ・ボール(水と石コウを混ぜる容器)
- ・じょうご(ペットボトルの中に石コウを流し込む)
- ・絵の具(市販されている一般的な水性絵の具)
- ・スタッフ(鳥の巣状の台座をつくる植物の繊維状のもの)

#### (2) 試行とサンプルづくり

初めて体験する学芸員2名に協力してもらい、制作を進める上で問題点がないかの確認と広報用のサンプルづくりを行った。手順が簡単なため問題なくできたが、念のためホワイトボードに以下のように制作の順序とコツを簡単なイラスト入りで書いておき、途中で参加する方にも分かるように配慮した。

#### (3) 制作過程

- ①ペットボトル半分くらいの水をボールに入れる。



写真 5



写真 6

- ②色を付けたいときは、絵の具を入れよく混ぜる。
- ③水面と同じ高さになるくらい石コウを入れ、泡立てないように混ぜる。
- ④じょうごでペットボトルの中に流し込む。
- ⑤ふくらませた風船とペットボトルをつなげ、風船の中に石コウを流し込む。
- ⑥風船の口をむすんで、ゆっくり指の力を入れずに回す。
- ⑦ゴム風船を破り、スタッフの台座の上にのせて完成。

制作上、やや難しいのは、後半の⑤と⑥、⑦で小さな子どもでは、なかなか難しく、補助が必要になる。⑤では、風船の口の部分を何回転かひねって、空気が漏れないようにしておくとうまくつなげることができる。⑥では、ダブルクリップなどで口を閉じても可能である。⑦では、中の石コウが十分固まっていなかったり、石コウの厚さの偏りがありすぎると、ゴムの内圧によってつぶれてしまう危険性がある。また、多少の穴や亀裂はできてしまうので、傷一つ無い完璧なタマゴをつくることを目標としないようとする。

このようにしてつくったそれぞれ色をつけた三つのサンプルをポスターとともに展示台に乗せ、広報用とした。その際、広報効果を高めるために次のようなメッセージを添えた。『どうぞ手にとって、感触を味わってください。「生まれ出ようとする鳥は、自らをとりまく一つの世界を破壊しなければならない」ヘッセ』

#### (4) 制作 I (写真1～5)

(中学校美術部 参加者13名 10:00～12:00)

事前に中学校の美術部から制作希望があり、一般の参加者と重複しないように予定にはなかったが、午前中に実施した。

1, 2年生の美術部員12名と顧問の13名での制作となつた。顧問の先生の話によると、学校で石コウを扱うことがないので、良い機会になると思い参加したそうである。実際の制作では、慎重になりすぎて、時間が過ぎてしまい石コウの硬化が進みうまくできなかつた生徒が数名いた。しかし、時間的・材料的にも余裕があり、2回目、3回



写真7



写真8

目と夢中になって制作を進めていくうちに石コウの扱いに慣れてきて、思いどおりできた笑顔がみられるようになった。以下は、顧問の先生と生徒の感想の抜粋である。

- ・今まで石膏を扱ったことのない生徒たちでしたので、新鮮な驚きのある体験になったと思います。他の生徒に得意そうに見せている姿が微笑ましくあり、充実した時間を過ごせたことに感謝しています。
- ・「アートなタマゴ」を3回も作させていただいてありがとうございました。風船に石コウを流し込んで固まる時のあのぬくもりが忘れられません。感動しました。また、このワークショップがあったら、参加したいです。
- ・石コウで何かを作ることは私にとって初めてだったので、とても楽しかったです。次に石コウを使う機会があったら、またタマゴの形を作ってみたいです。
- ・石コウのタマゴの作り方を教えてくれてありがとうございます。タマゴを友だちに見せて材料を言ったら驚いていました。タマゴ作りはおもしろかったです。

#### (5) 制作Ⅱ(写真6~10)

(一般参加者42名 14:00~17:00)

当日は、「藤城清治 光と影のファンタジー」の企画展を行っており、観覧者数が2,080名と多く、ワークショップへも親子連れを中心にたくさんの方々から参加していただいた。制作は、お子様を中心に、親御さんは補助に役割分担をしたのだが、気がつくと夢中になっている親御さんが多く見られた。石コウと水の割合の違いで硬化するタイミングがそれぞれ異なり、失敗する確率が3割ほどと高くなってしまったのだが、失敗したからすぐに帰る方は一人もなく時間が許す限り、繰り返し挑戦・追求されていた。

また、小学校低学年前後のお子様が多く、ゴム風船をハサミで破るとき、「生まれたね」と声をかけると笑顔になり、温かく滑らかな感触を味わっていた。亀裂や割れが大きいタマゴになったときは、「タマゴから生まれ出たんだよ」と声をかけ、亀裂や割れがあることが失敗ではないとフォローした。

予想以上の熱心さに子どもから大人まで楽しめる題



写真9



写真10

材である自信が持てた。終わってみると時刻は、閉館時刻となり、25kg入りの石コウもほとんど無くなっていた。大盛況であった。最後の親御さんから、「図画工作が好きではない自分の娘が、これを作つてみたいといつうので、参加させてもらった。こんなに喜んでタマゴを作つている姿を見て、本当にありがたかった。次回はいつやるか教えてください。」という感想をいただき、励みになった。

#### 4 タマゴづくりのねらい、用途

今回のワークショップのねらいは、石コウという造形素材とゴム風船を使って、張りのある滑らかな曲面のタマゴづくりを楽しむことと、思いや夢を豊かにふくらませることにある。タマゴそれ自体は、オブジェであり、用途や機能性はない。しかし、つくりあげたものを何かに応用したり、用途を考え出したりすることも楽しいことである。制作Ⅰでの中学校の美術部員に聞いてみたものを列挙すると、以下のようなアイディアが出された。

- ・小物入れ(フィギュアやアクセサリーなどの入れ物)
- ・貯金箱
- ・キャンドルの容器(中に蠟を流し込む)
- ・ランプシェード(ドリルで穴を開け、電球を入れる)
- ・植木鉢
- ・ドライフラワーの鉢(中にビーチなどを入れ、ドライフラワーを立てる)

まだまだ考えれば、いろいろとアイディアが出てきそうだが、結果としてのタマゴの使い途よりも、つくる行為そのものから題材としての発展的なねらいを考えて構成するのも面白いのではないかと思う。

具体的には、風船の中に石コウを流し込み、ゆっくりと回すときに、「そのタマゴの中から何がうまれてくるんだろう」というテーマを設定し、石コウが固まり温かくなるまでの時間、その想を練り上げる。鳥や伝説上の生き物、花火など具体的なイメージでも良いだろうし、希望や不安など抽象的なイメージでも良いだろう。そのイメージを平面や立体に表現し、世界観をかたちづくっていく。つまり、タマゴづくりは、内面世界表出のためのきっかけとなり、スタート地点となるわけである。

#### 5 おわりに

石コウを使って、充分とは言えない設備の中ででも、つくる喜びを味わってもらえるように考えたワークショップを実践したわけであるが、家庭や学校、公民館などの公共施設でも十分、実践可能なものである。つくる行為と思いの拡張を中心としたこのワークショップは、アウトリーチの学習モデルとして学校などの団体との連携が期待でき、教育普及という側面において、美術館から発信していく、一つの柱となる可能性がある。

(新潟県立近代美術館 学芸課長)